



スマートフォン用ホームページ

パソコン用ホームページ URL

—— <https://www.kawaguchi-lib.jp>

スマートフォン用ホームページ URL

—— <https://www.kawaguchi-lib.jp/opac/s/>

携帯電話用ホームページ URL

—— <https://www.kawaguchi-lib.jp/opac/k/>

公式ツイッターアカウント

—— @kawaguchi_lib



携帯電話用ホームページ

わたしの今年の一冊 2021

昨年お読みになった本の中で、印象に残った一冊を紹介していただく「わたしの今年の一冊」は、今回で 26 回目となりました。たくさんのご応募をいただきましたが、紙面の関係で 24 点掲載させていただきます。

「7.5 グラムの奇跡」 砥上裕将／著

講談社 2021 年刊 913.6/ト

視能訓練士ってご存知でしたか？

眼科で働いていて、よく検査に携わる方々で、この本の主人公です。眼科というと「検査が多い」と感じていましたが、この本を読んだ、検査の意味等を知ることが出来て勉強になりました。眼科が少し身近に感じる事が出来ました。(50 代)

「水がなくなる日」 橋本淳司／著

産業編集センター 2018 年刊 517/ハ

私たち、特に日本に住む人々にとって当たり前にある水について、SDGs(持続可能な開発目標)の点から考えさせてくれる1冊。日本にいるからこそ気づけない水の役割や食糧の輸入大国日本が意識しなければならない水の問題について知るきっかけになる。大人から子どもまで、手軽に読み、考えるべき内容。(20 代)

「イラストレイテッド日本のおばさん」

豊村真理／著 バジリコ 2020 年刊 367.2/ト

書名を見ただけでもおもしろそうな本だと思っていたが、実に多くの“おばさん”をイラストで見せてくれる。作者の観察力はみごとである。自分は作者の考えるおばさんの年齢枠を超えているようだが、やっぱり自分に似ているおばさんを探してしまう。何とんでも“おじさん化しているおばさん”と“サウナ室のおばさん”は秀逸である。思わず笑ってしまうおばさんに会えます。(60 代)

「ショローの女」 伊藤比呂美／著

中央公論新社 2021 年刊 914.6/イ

ヒロミさんはホントにサビシイだろう。マメなひとだから、自分を奮い立たせて頑張っている。死にそうなくらい忙しくしている。コロナでヒマになってしまい、ホントに戸惑っているのだろう。だから猫2匹を引きとって、犬だ！猫だ！植物だ！パンだ！と、めまぐるしくしている。全身全霊で生きている。凄いぞ！！(60 代)

「名古屋駅西喫茶ユトリロ」

太田忠司／著 角川春樹事務所

2016 年刊 B 913.6/オ

名古屋出身の自分が読んで自然な名古屋弁でした。ところどころに出てくるお店や料理も今、なお、あるものばかり。大変おもしろかったです。(40 代)

「十二人の死にたい子どもたち」

冲方丁／著 文藝春秋

2016 年刊 913.6/ウ

色々な理由で集まった 12 人の死にたい子どもたちが、集まった場所でおこった出来事やなぞをかい決しながらもいろいろなことに気づくことや内容の流れもおもしろかったです。(10 代)

「硝子戸の中」 夏目漱石／著

新潮社 2000 年刊 B 914.6/ナ

夏目漱石が自己のことについて書いた体験や回答の本。著者が自己のことについて書いた唯一の本。一種不思議な明るさを感じられる。(60 代)

「ペイ・フォワード」

キャサリン・ライアン・ハイド／著 法村里絵／訳
角川書店 2000 年刊 933.7/ハ

クリスマスの展示の中にあった本ですが、親切にして助けてもらう～それを、誰か困っている人を助けてあげて、という、少年の純粋な気持ちから始まった運動で、世界中にその思いが伝わり、あたたかい気持ちをプレゼントしてもらいました。(不明)

「弁当屋さんのおもてなし」 喜多みどり／著 2017 年刊 B 913.6/キ

現時点で出版されている9巻のうちの第1巻。「くま弁」の店員ユウが、千春が頼んだ弁当とは違う物を渡してしまうところから物語は始まるのだが、その理由は千春の具合があまりにも悪そうで、注文のザンギ弁当は無理だと思ったからという、何とも優しい理由。相手の気持ちに寄り添うことの大切さと難しさについて、改めて考えさせられた。ユウと千春の関係もお約束の展開ではあるが、さらりと描かれていて温かい気持ちになれる。(不明)

「ワーママはるのライフシフト習慣術」

尾石晴／著 フォレスト出版 2021 年刊 159.4/オ

ワーママ必読の 1 冊。子育て、仕事、お金、人間関係、学びの章立てで人生 100 年時代を賢く生き抜く Tips が盛りだくさんで、掲載されている音声コンテンツ(Voicy)も合わせて聴くことでより理解を深められる。読了後には Voicy を聴きながら通勤する毎日になること間違いなし。(30 代)

「パチンコ」上・下 ミン・ジン・リー／著

池田真紀子／訳 文藝春秋 2020 年刊 933.7 /リ

在日コリアンの 4 代にわたる物語。朝鮮に生まれた真面目で堅実な女性ソンジャは大戦中の大阪に移り住み、父親の違う男の子二人を育てる。戦後の日本社会の中で在日として大人になっていく子と孫。タイトルに驚かされるが、パチンコ店は出てくるがパチンコの話ではない。2017 年アメリカのベストセラー。なぜか私は昔々に読んだパール・バックの「大地」を思い出した。(80 代)

「空也上人がいた」 山田太一／著

朝日新聞出版 2011 年刊 913.6/ヤ

特別老人ホームに勤めている主人公が、ある理由でそこを辞めてから、勤め先のマネージャーに老人の個人介護を頼まれる。仕方なく了解し、気難しい 81 歳の老人介護を引き受ける。その老人に依頼され、京都にある空也上人の彫刻を訪ねることになるのだが……。過去の懺悔・マネージャーへのほのかな愛・老人の覚悟の死。痛みを抱えた 3 人のほのかな恋がミステリアスな部分も含めて全編に優しく流れる。(70 代)

「最高のアフタヌーンティーの作り方」

古内一絵／著 中央公論新社 2021 年刊 913.6/フ

「お菓子は最高のご褒美だ」甘いものが大好きな祖父の影響から、アフタヌーンティーの開発者になった涼音。「お菓子はただならした気持ちで食べてはいけない」祖父の教えの裏にあった戦争孤児となったつらい思い出を最後に証されたときは、気づいたら背筋が伸びていました。季節の移り変わりとともに変化のあるホテルのアフタヌーンティーの世界を美しく表現している中で、ホテルで働く人、お客様の気持ちの表現が現実感があり、今の時代を働く人々にぜひ読んでほしい一冊です。(40 代)

「悲しみの秘義」 若松英輔／著 文藝春秋

2019 年刊 B 914.6/ワ

くやしい事もあっただろう。反撃したいだろう。でも公害を背負ったきよ子の動くことの出来ない手でひじから血を流しながら花を拾おうとするきよ子の気力から見たら、自分はまだまだだと思う。(70 代)

「わたしは「セロ弾きのゴーシュ」」 中村哲／著

NHK 出版 2021 年刊 333.8/ナ

中村先生関係の本はほとんど読んでおりますが、最新刊のこの本はインタビューを再現したもので、大変読みやすく、アフガニスタンでの状況なども解りやすく説明されています。「セロ弾きのゴーシュ」も中程に全文掲載されているサービスぶりです。先生の言葉によって又、添えられた美しい写真によっても現代の日本人が忘れかけている、人間として大切なことを沢山学ばせて頂きました。(60 代)

「ザリガニの鳴くところ」

ディーリア・オーエンズ／著 友廣純／訳

早川書房 2020 年刊 933.7/オ

本屋大賞・翻訳部門一位の作品。

米ノースカロライナ湿地帯で周囲から孤立し、自然を相手に暮らす少女が成長する姿が描かれている。沼で見つかった男性の遺体をめぐる謎解きも面白い。コロナ禍で行動が制限される生活を余儀なくされる今、湿地で貝を拾って生きる姿がたくましい。「どんな命にも生きようとする力が備わっているんだ」という生き方に勇気もらった。(不明)

「心淋し川」西條奈加／著 集英社

2020 年刊 913.6/サ

時代小説はほとんど読まない私だが、直木賞受賞作ということで手に取った。江戸千駄木町の一角に、「心淋し川」と呼ばれる淀んだ川が流れている。川沿いの古い長屋で暮らす人々は、貧しいながらも懸命に生を紡いでいる。上品な筆致で一気に読ませる。「誰も心にも淀みはある。でもそれが、人ってもんでね」というフレーズが、胸に沁みだ。(70 代)

「むかしむかしあるところに、

死体がありました。」

青柳碧人／著 双葉社 2021 年刊 B 913.6/ア

まずタイトル、表紙から内容の気になる一冊。昔話とミステリーの組み合わせはとても面白く、一つひとつの結末は毎回予想していなかった事実で驚きました。こんなにもミステリーに夢中になって読んだのは初めてで短編で読みやすいのでオススメです！(20 代)

「いつでも母と」山口恵以子／著

小学館 2020 年刊 914.6/ヤ

お母さまの介護のお話です。自分と重ねあわせ過去の日々を思い出しながら読みました。大変だったことも大事な思い出です(60 代)

「不安と折り合いをつけて

うまいこと老いる生き方」

中村恒子／著 奥田弘美／著

すばる舎 2021 年刊 159.7/ナ

戦争体験など波乱万丈な人生を歩んできた92歳の精神科医の中村先生の話と54歳の精神科医奥村先生が聞き書きしている本です。経験からくる言葉は温かく深みがあり、決して押しつけがましくない。老いを怖がらない、他人と比較しない、孤独との向かい合い方など気持ちがラクになります。(不明)

「古くて素敵なクラシック・レコードたち」

村上春樹／著 文藝春秋 2021 年刊 760.8/ム

クラシックに造詣が深い作者が、コロナ禍のこの一年自宅の LP を聴き直して書きおろした一冊。歴史的な名盤だとか偉大な演奏家だとかの情報は今の時代溢れているが、やはり自分の耳で決めなくてはいいけないと断言する。また LP レコードはレコード盤の手入れをするとそのぶん音が良くなる。これを「レコードの恩返し」と呼んでいるという。音楽への溢れる愛に胸が熱くなった。(70 代)

「僕たちはどう生きるか」森田真生／著

集英社 2021 年刊 914.6/モ

コロナ禍でよすがを求める閉ざされたような日々。今、人は何を考え何を大切に生きていけばいいのか指標となり思索を巡らせるヒントに満ちています。引用された言葉、書の参照もきっちり載っていて更に思考を深める手引きにもなります。未来のたくさんある小学校高学年にも読んでほしい本。(50 代)

「土を喰う日々」水上勉／著 新潮社

1982 年刊 B 596.2/ミ

コロナ禍で、健康のために食べることは大切だと実感している折に読んで、とても興味深かった。旬の物を食べることは、畑と相談することであり、土を喰うことだという著者の考えに共感した。子どもの頃にお寺で修行した著者のレシピは、季節を感じさせるもので、料理することは楽しいことだと思えた。(50 代)

「素敵な日本人」東野圭吾／著 光文社 2017 年刊 913.6/ヒ

本には、それぞれ必ず著者から読者へ物語を通してメッセージがあります。東野さんは、長編が多くとても面白いですが、これは読みやすく、逆に短すぎて物足りなさを感じてしまいましたが、『我慢なんかなくても、自分なりに楽しみながら苦難を乗り越えていく術があるとわかっているのだ』なるほど、本当に！人生、面白くうけとめればなんとかなる！さて、どの物語があなたは気に入りましたか(笑)(50 代)

このほか、

- 「ルルとララ」あんびるやすこ／著 ●「告白」湊かなえ／著 ●「星を掬う」町田そのこ／著
●「交番の夜」名取佐和子／著 ●「オークブリッジ邸の笑わない貴婦人」太田紫織／著
●「とても温かとてもせつないきみの絵本」ジュヌヴィエーヴ・カスターマン／原作
●「そして、バトンは渡された」瀬尾まいこ／著 ●「多様性の科学」マシュー・サイド／著
●「冬虫夏草」梨木香歩／著 ●「お探し物は図書室まで」青山美智子／著
●「デフ・ヴォイス」丸山正樹／著 ●「ああ面白かったと言って死にたい」佐藤愛子／著
●「鴻上尚史のますますほがらか人生相談」鴻上尚史／著 ●「自転しながら公転する」山本文緒／著
●「無脊椎水族館」宮田珠己／著 ●「スモールワールズ」穂ミチ／著 ●「折々の葉」藤原てい／著
●「チャーリー、こっちだよ」キャレン・レヴィス／著 ●「野良犬の値段」百田尚樹／著
●「ケーキの切れない非行少年たち」宮口幸治／著 ●「一橋桐子<76>の犯罪日記」原田ひ香／著
●「1ねん1くみ1ばんどタバタ」後藤竜二／著 ●「ふしぎ駄菓子屋銭天堂」廣嶋玲子／著
●「100万回死んだねこ」福井県立図書館／編著 ●「木曜日にはココアを」青山美智子／著
●「くらべてわかる文鳥の心、インコの気持ち」細川博昭／著 ●「照降町四季」佐伯泰英／著
●「脳科学者の母が、認知症になる」恩蔵絢子／著 ●「童話が育てる子どもの心」西本鶏介／著
●「心に折り合いをつけてうまいことやる習慣」中村恒子／著 ●「痴人の愛」谷崎潤一郎／著
●「美しき愚かものたちのタブロー」原田マハ／著 ●「ガラスの海を渡る舟」寺地はるな／著
●「特攻隊員の現実(リアル)」一ノ瀬俊也／著 ●「沈黙のパレード」東野圭吾／著
●「夜明け前」島崎藤村／作 ●「ガラスの海を渡る舟」寺地はるな／著
●「暴力と不平等の人類史」ウォルター・シャイデル／著 ●「見知らぬオトカム」池内紀／著
●「人新世の「資本論」」斎藤幸平／著 ●「グレタたったひとりのストライキ」マレーナ・エルンマン／他著
●「ハリー・ポッターと死の秘宝」J.K.ローリング／作 ●「さんねん峠」李錦玉／作
●「マジックツリーハウス」メアリー・ポープ・オズボーン／著 ●「半藤一利の昭和史」
●「アドルフ・ヒトラーの青春」アウグスト・クビツェク／著 ●「もものかんづめ」さくらももこ／著
●「100万回生きたきみ」七月隆文／著 ●「クララとお日さま」カズオ・イシグロ／著
●「月は誰のもの」宇江佐真理／著 ●「腎臓病は運動でよくなる!」上月正博／著
●「明日の私の見つけ方」長月天音／著 ●「しろいろの街の、その骨の体温の」村田沙耶香／著
●「俺の妹がこんなに可愛いわけがない」伏見つかさ／著 ●「お勝手のあん」柴田よしき／著
●「マタビ町は猫びより」田丸雅智／著 ●「病気の9割は歩くだけで治る!」長尾和宏／著
●「薬屋のひとりごと」日向夏／著 ●「天地明察」冲方丁／著 ●「風の市兵衛」シリーズ辻堂魁／著
……などの本をご応募いただきました。

紙面の関係で、お寄せいただいたご感想や書
名のすべては掲載できませんでした。
ご協力いただきました皆様、
ありがとうございました！！



◆開館状況について◆

現在、図書館では感染症拡大防止のため、状況に応じてサービスを一部縮小しております。最新の開館情報については、図書館ホームページ等でご確認ください。

川口市立図書館 連絡先・開館時間

【中央図書館】

☎ 048(227)7611
住所: 川口市川口 1-1-1

平日
午前 10 時～午後 9 時

【前川図書館】

☎ 048(268)1616
住所: 川口市前川 3-4-27

【戸塚図書館】

☎ 048(297)3098
住所: 川口市戸塚東 3-7-1

【新郷図書館】

☎ 048(283)1265
住所: 川口市東本郷 1688

【鳩ヶ谷図書館】

☎ 048(285)3110
住所: 川口市坂下町 3-16-6

【横曽根図書館】

☎ 048(256)1005
住所: 川口市仲町 10-16

【芝園分室】

☎ 048(269)2241
住所: 川口市芝園町 3-17

平日
午後 1 時～午後 5 時